

ダリがサインした「何百枚もの白い紙」の行方

キツネやタヌキが人を化かす話は昔からありますが、平安時代の説話集「今昔物語集」にはイノシシが人を化かす話もあります。イノシシも人をだますのかと驚きますが、人が人をだます話にはあまり驚きません。中でも、美術品の贋作、偽物作りは昔から世界中で行われています。雪舟の作といわれている水墨画は一万点以上あるといわれていますが、本物は数点しかないともいわれ、文芸評論家の小林秀雄氏が「雪舟の作品は、欲しい人の数だけある」と言い残したのは有名です。海外を見ても、ニューヨーク税関の記録で、1909年から1951年の間に米国に輸入されたレンブラントによる絵画は9428点。この数字が正しければ、レンブラントは生涯を通して、3日に2点のペースで作品を製作したことになるそうです。ダリがいたずらでサインした白紙は何かを書き加えられ美術史家を悩ませることになり、1987年に安田火災海上保険が58億で落札したゴッホは贋作の噂が絶えません。化かしたり、化かされたりの話は、高級ブランドの模造品から食品偽装まで枚挙にいとまないわけです。そうすると、目が利くかどうか重要になるわけで、「開運！なんでも鑑定団」なる番組が長く人気なのは当然かと思われます。司会の島田紳助氏（2011年引退）は「掛け軸の真贋は90%当てられる」と豪語していたそうですが、「番組で覚えたのは、本物は十本に一本もないという事実。だから、掛け軸を見せられたら『ニセモノです』と答えておけば、まず間違いない」そうです。面白いですね。

さて、目利きが大切になるのは、美術品の真贋だけではなくありません。先日、卒業式を終えましたが、3年生それぞれが就職希望はもちろん進学希望でも、面接試験を受けています。この試験で面接官は受検生の「品定め」を行うわけですが、我々としては、キツネやタヌキのように面接官を騙そうとは思いません。3年間の生徒たちの頑張りの成果を見てもらうしかないわけですから、せめて短い面接時間でそれが出るように指導しています。ただし、付け焼き刃にならないようにメッキがはがれないように、普段からの指導が大切なわけです。何よりも生徒には3年間で自分を鍛えるという決意をしっかりとってもらいたいですし、卒業後もそうあってもらいたいです。

以下、卒業式で述べたことを繰り返します。

「就職する人は一日の多くの時間を仕事に費やします。進学する人はより専門的で難易度の高い学問に取り組むので、やはり多くの時間を費やします。しかし、そうした時間が皆さんの血と肉となるのです。勉強するのは高校で終わりではありません、一生何かの勉強をし、努力を続けたいといけません。テレビで華やかに振る舞うスターも格好良くプレイするスポーツ選手も、誰も見ていないところでは、血のにじむような努力をしているはずで、ただそれを見せただけです。私は努力さえすれば、夢や理想が絶対にかなうとは言いません。ただ、それをかなえるだけの、無限と思えるほどの時間と可能性が、皆さんにはあります。1日は24時間、1年は365日。それが何十年もあるのです。気が遠くなるような芳醇な時間です。無駄にせず、大きな夢と理想をもって、一日一日を大切にしてください。長い時間をかけて努力をすれば、たとえかなわなくとも、それに見合ったものを必ず手にできると信じています」

卒業生・在校生・新入生ともに「ホンモノ」を目指してもらいたいものです。

令和6年3月4日 大村城南高等学校長 中小路尚也